

日本海沿岸地域出土の中世銅製花瓶の基礎的研究

松葉竜司

1. はじめに

銅製花瓶(けびょう)は古代、9世紀後半には出現していたと考えられる銅製仏器の一種で、もとは密教の修法などの場で用いられた密教法具の一つを構成した文物である。列島各地で、古代末期にかけてのものが経塚や山岳祭祀に関する遺跡、寺院遺跡などから出土する(不時発見を含む)。中世以後においても密教法具や仏具・祭祀具として用いられたため、一定数の出土・発見事例が知られている。現在に法灯を護る寺院や、博物館・大学等で収集されて今日に伝世するものを含めれば、相当数の花瓶が今日に伝わっているものと推察される。

特に中世に用いられ、地中から出土、不時発見される銅製花瓶は、北陸から北信越の地域を中心に分布する傾向があり、また北陸地方から関東地方の一部においては銅製の三具足(觚(こ・さかずき)形花瓶・香炉・燭台)の出土も認められるなど、広く東日本に多く認められる文物である。

これまでの調査研究において、仏教史や美術工芸史の立場から、銅製花瓶が古代密教法具の一つとして博物館図録や概説書などで取り上げられることはあった。

また、考古学の立場から、地中からの出土・発見事例に際して報告・レポートされた例もある。しかし、十分な研究の蓄積があるわけではなく、明確な根拠が示されることなく花瓶の年代観が示されるなど研究上の支障となっている例も散見される。

したがって、本研究では主に日本海沿岸地域の遺跡から出土する中世の銅製花瓶を主な対象として、極力、実物資料を実見・観察した上で、その形態によって分類した卮字形花瓶、徳利形花瓶、觚形花瓶のそれぞれについて、分析、検討を加える基礎研究をおこなった。

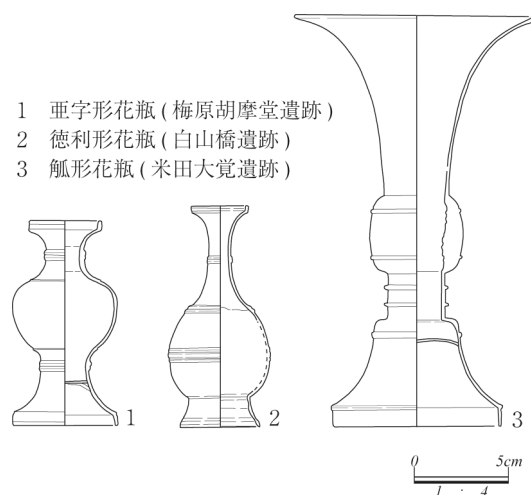


図1 銅製花瓶の諸例

2. 調査研究の概要(文献調査、現地調査、検討等)

本研究では、まず発掘調査報告書、自治体史、博物館報、研究論文等の文献資料を探索し、帰属時期を問わず列島各地の地中からの出土(不時発見を含む)銅製花瓶について集成し、データベース化した。令和8年12月現在、卮字形花瓶34例、徳利形花瓶20例、觚形花瓶13例を数える。

出土・発見例の多い北陸、北信越の地域を中心とした日本海沿岸のそれぞれの事例について、資料の所有者、管理者のご協力のもと、手に取っての熟覧観察、一眼レフミラーレスカメラでの写真撮影、可能な場合はスマートフォンのアプリ Reality Scan



写真1 資料調査の様子(廿日市市役所)

Mobile を活用した三次元モデルの生成とそれを基にした実測図作成等の資料調査を随時、実施した。

調査点数は、亜字形花瓶34例中9例、徳利形花瓶20例全て(うち6例は本研究助成の対象外)、觚形花瓶13例中6例を数える。

これまで写真のみで存在が知られていた花瓶の実測図作成を三次元モデルからおこなう試みは失敗したケースも間々あり、試行錯誤の連続であった。ただ、三次元モデルからオルソ化(二次元化)することに成功したものもあり、実測図作成の一助となっている。



図2 銅製亜字形花瓶の三次元モデル(東間テラノテ出土)

これらの資料調査を踏まえて、それぞれの形態ごとに銅製花瓶の法量、形態的な特徴、分布、時代別の消長、型式変化、共伴遺物(仏器)の構成、花瓶の性格などを検討、分析し、本報告にてまとめた。

なお、調査を予定した一部の資料については、所有者・所有機関等のご理解が得られず、後年に調査日程を送ったもの、あるいは調査そのものが実施できなかったところもある。

3. 今回の調査研究の内容

(1) 銅製亜字形花瓶

管見に触れるだけで、34例が知られる。把握できていないだけで、実際にはさらに出土事例があるものと推察される。1世紀以上前に東城寺経塚での発見事例も紹介されており(和田1904)、古くより関心を集めてきた器物と言える。

この亜字形花瓶は、密教法具の一つを構成するものとして調査研究の対象とされてきたが(石田1937、奈良国立博物館1964、石田・岡崎1965等)、総じて仏教美術品として紹介、公表されることが多かった。ただし、その中においても花瓶の形態の特徴とその変化に関する言及がなされており、時代を降るごとに各部位の法量が大型化、器高も高くなることが指摘されている。しかし、公表されているものは古代に属する花瓶が圧倒的に多く、中世に属するものはほとんど取り扱いがされておらず、一部が資料紹介されるにとどまるため、中世に伴う花瓶の様相がほとんど知られていない。

考古学の観点からその形態変化に着目し、9～12世紀の銅製亜字形花瓶に関する編年が提示されており、修善寺例、大覚寺御所跡例、那智経塚例へと変遷したことが指摘されている(小池1997)。それでも、やはり古代に伴う花瓶に対する研究であり、銅製亜字形花瓶に関して言えば中世の様相をあきらかにすることが大きな課題と言えよう。

今回の調査研究で、中世に属するものを中心に9例の資料を調査することができた。

【法量・形態的な特徴】

胴部が最大径となる形態で、その形態的な特徴から「亜」という漢字文字を名称に付す。器高7～11cmほどの幅があるが、8～10cmほどのものが多い。

中世以後の花瓶に関しては大型化の傾向が指摘されているが、8cm前後(図4-8・9・13-15)と10cm前後(図4-7・10-12)の器高をもつものに大別でき、地中から出土するものに限れば、先行研究で指摘されている

ような大型化は顕著には認められない。

【時代別の消長・分布】

図4-1、修善寺例が9世紀前半には出現した可能性が推測されているように(小池1997)、古代末期にかけて密教法具の一つとして経塚や寺院、山岳遺跡などから出土することが知られる。中世にも継続して用いられたようで、地中からの出土事例は北陸を中心に、北信越周辺の一部と近畿地方の一部に偏っている。

【型式変化】

古代に伴うものは小池伸彦氏の編年があり(小池 1997)、図 4 において 1. 修善寺→2. 大覚寺御所跡→6. 宗高尾城跡^{註1}への変遷が該当する。その型式変化の特徴は、①頸部は体部との境から上方に立ち上がり外反する形態が踏襲される一方で、極初期に見られなかった頸部 2 条の紐帯が以後、古代末期にかけて見られるようになること、②胴部は上位の肩付近が張り、逆台形を呈するものが、以後、上下に段をもつようになり、古代末期には段が形骸化し、丸みを帯びること、③脚台部は古代末期にかけて高くなり、極初期には見られなかった脚台部 2 条の紐帯が見られるようになり、古代末期にはその位置が胴部寄りになること、という点に整理できる。1. 修善寺は 9 世紀前半に遡る可能性が指摘され、また 2. 大覚寺御所跡は 9 世紀後半から 10 世紀初頭の溝に伴うことがあきらかにされており(小池 1997)、6. 宗高尾城跡は相伴土師器の年代から 12 世紀に伴うことが知られることから(七尾土地区画整理組合 1998)、図 4 の 3~5、男体山・戸隠山西窟・如法寺の各例は 9 世紀後半以後、12 世紀直前までに伴うものと推定される。

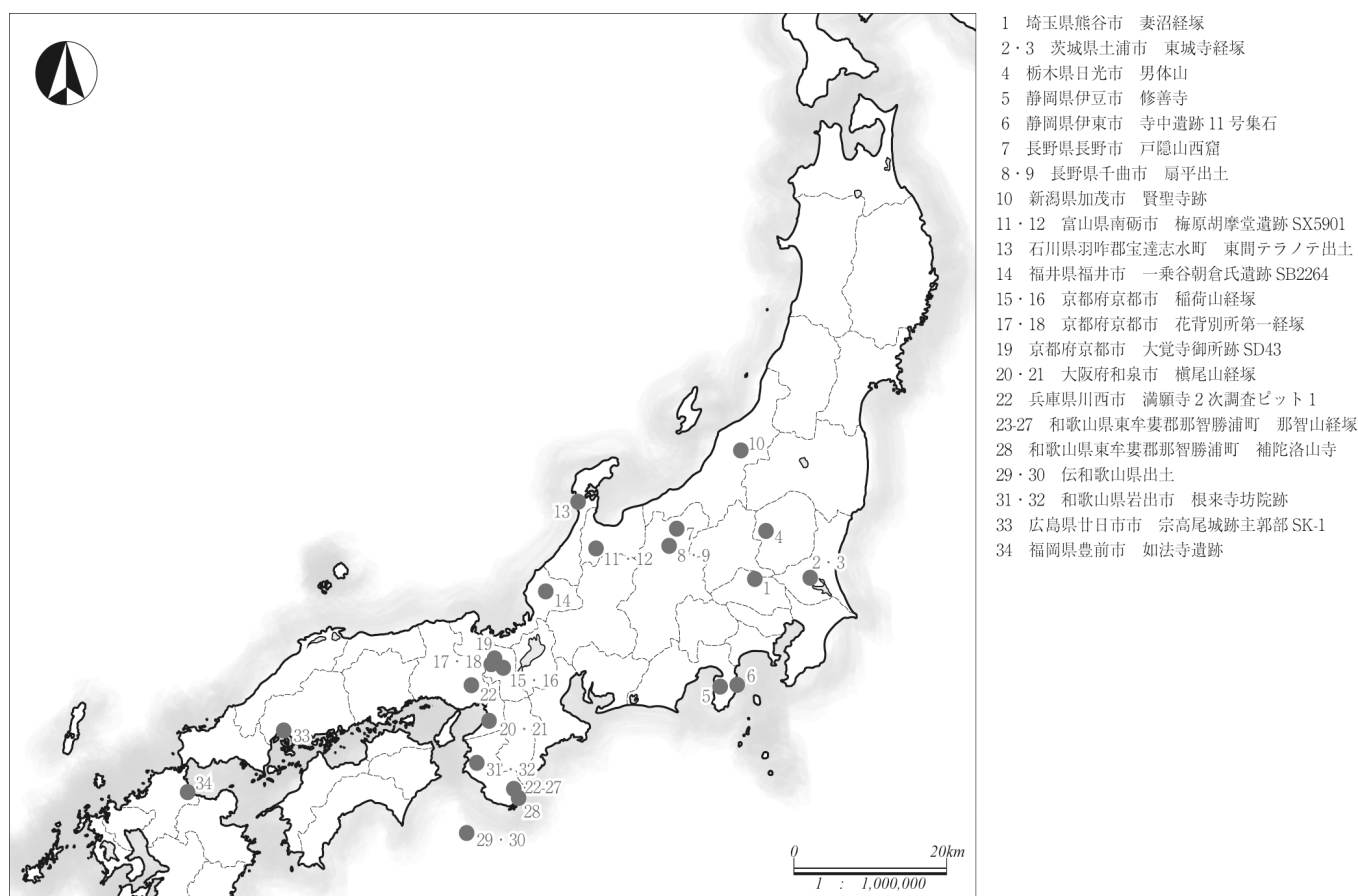


図 3 銅製亜字形花瓶の分布



1 修善寺 2 大覚寺御所跡 3 男体山 4 戸隠山西窟 5 如法寺 6 宗高尾城跡 7 満願寺 8・9 千曲市扇平
 10・11 梅原胡摩堂遺跡 12 一乗谷朝倉氏遺跡 13 宝達志水町東間テラノテ 14 賢聖寺跡 15 根来寺坊院跡

図4 銅製罍字形花瓶の諸例と形態変化

ほとんど論じられることがなかった中世における銅製罍字形花瓶(図4の7-15)の型式変化を検討すると、7. 満願寺例が共伴する古瀬戸花瓶の年代観から13世紀後半頃に、14. 賢聖寺跡例がその形態的な特徴から13世紀に伴う可能性が指摘されている(川西市教育委員会1985、水澤2016)。両者は、A. 器高が高く、頸部が胴部からまっすぐに立ち、胴部の上下に段をもち、脚台部はハの字の大きく開く、という特徴に収斂する。この他に、図4-13に見るように、B. 器高が低く、頸部と脚台部は胴部から曲線的に連続して丸みを帯び、胴部そのものも球形化し、上下の段が形骸化するもの、がみられ、A・Bの2種に大別できる。7. 満願寺例、14. 賢聖寺跡例が13世紀に伴う可能性が高く、Aがこの鎌倉期に伴うものと理解すると、BはAの退化傾向を辿ることから14世紀以後に降る可能性を想定しておきたい。

【共伴遺物の構成・花瓶の性格】

古代に属する図3の1・5・7・15・21・23・28・33・34の諸例は、経塚や寺院、山岳祭祀に伴う遺跡から花瓶が出土した事例である。共伴する遺物も普遍的に経塚に納められる銅製鏡、あるいは銅製の金剛杵、六器、食器などの密教法具、あるいは鉄製の武器武具類、銅製銭貨などと共伴する事例が認められる。密教法具、祭祀用具としての意味合いが強い傾向があり、古代に伴う花瓶にはそのような性格が想定される。

中世に伴う図3の6・8・14・31・32の各例は集落遺跡や寺院推定地、城館跡などからの出土である。付近に寺院の存在が推定されている図3-8・9、千曲市扇平出土例は銅製の五鈷杵、六器、火舎とともに不時発見されており（長野市立博物館1994）、図3-31・32、根来寺坊院跡では谷部包含層からの出土であるものの、銅製の錫杖や独鈷杵、六器鉢が出土している（和歌山県教育委員会・財団法人和歌山県文化財センター1994）。また、図3-10、賢聖寺跡では15世紀の越前焼壺に納められた金銅製五鈷鈴・五鈷杵、六器鉢・台皿などが出土するなど（水澤2016）、密教法具が伴うあり方が後に続いている。一方で、図3-13、宝達志水町東間テラノテ出土例は花瓶が単独で出土し（押水町教育委員会1987）、また図3-6・11・12、寺中遺跡、梅原胡摩堂遺跡では集落遺跡出土のもので他に仏具・密教法具を伴っていない（伊東市教育委員会1993、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996）。図3-14は16世紀の一乗谷朝倉氏遺跡という守護大名の居館跡に伴うもので、地鎮に使用されたと考えられる出土のあり方が確認されている（福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館1983）。

中世においては、古代から見られたような密教法具を伴う埋納形態が寺院跡で認められる一方で、仏器・仏具の一つとして、あるいは祭祀具として集落遺跡や居館跡などで単独で使用された状況も確認される。

（2）銅製徳利形花瓶

管見に触れるだけで、20例が知られる。

皿字形に加えて徳利形の花瓶が存在することは古くから指摘されており、天台座主・慈覚大師との関係性を指摘する見解もある（奈良国立博物館1964、石田1984）。実際に天台系に伴う器物とは断定できないが、出土・伝世例を含めて確実に古代まで遡る事例は管見に触れる限りでは認められない。

今回の調査研究で、20例全ての資料を実見することができた。

【法量・形態的な特徴】

細長い頸部、倒卵形・茄子形をなす下膨れの体部、高台部からなる形態である。法量は器高6～13cmほどと幅があるが、10cmほどのものが多く、図7の16・17にみるように20cm弱ほどの大型品の存在も見受けられる。頸部の中ほどに2条の紐帯をもち、体部の肩付近と体部最大径付近に2～3条の紐帯を伴うものが一般的である。紐帯は基本的に突帯をなす。

【時代別の消長・分布】

図6-9・10、くつがた遺跡例では13世紀後半の青磁碗を伴っているように（金子・宮腰1977）、出土事例からみて13世紀には出現しているものと考えられる。その分布は北信越地方とその周辺に偏る傾向にあり、時期ごとに出土状況に違いがみられる。

中世後期まで時期が降ると西日本にも分布が認められるようになる。

【型式変化】

13世紀後半から交14世紀における花瓶の形態は、頸部から体部にかけて強い曲線形となり、体部はあまり張らない倒卵形、茄子形、高台部は二段に開くか、その痕跡を留めるという特徴がある。

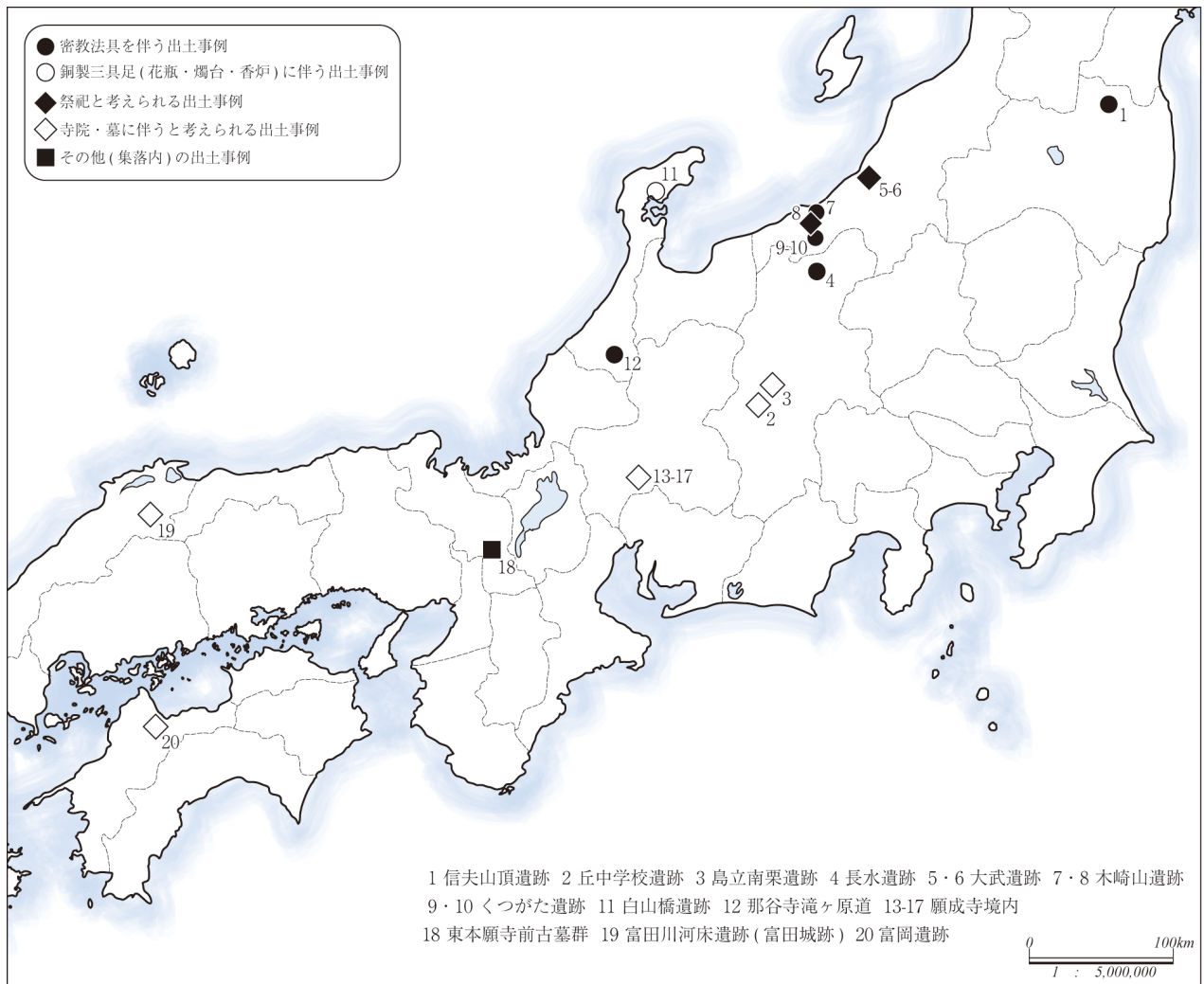
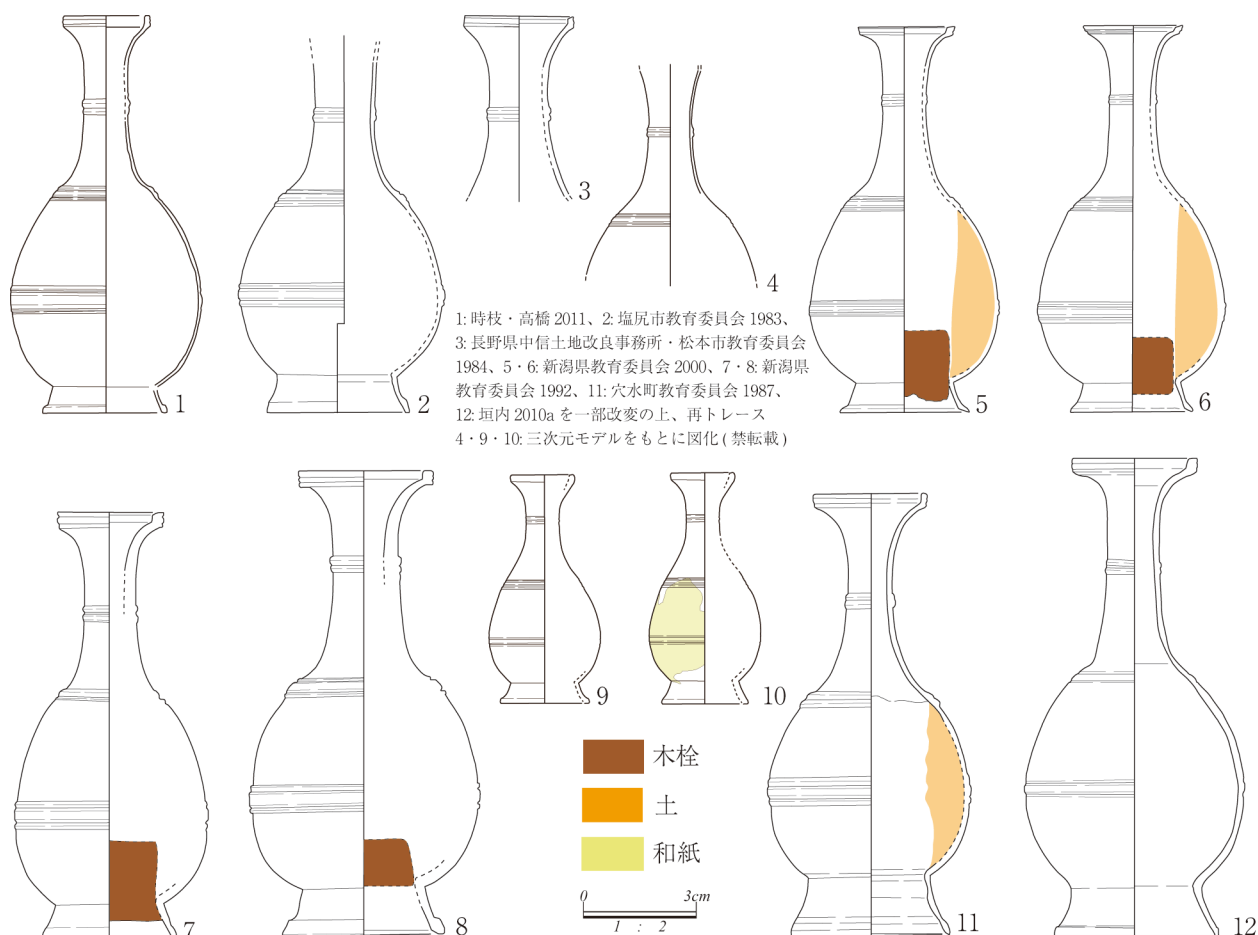


図5 銅製徳利形花瓶の分布

共伴青磁碗の年代から13世紀後半頃の埋納と考えられるくつがた遺跡例（図6-9・10）はごく小型で、頸部から体部にかけての曲線形が強く、低い高台部をもつ。共伴土器の年代から13世紀の埋納とされる木崎山遺跡54号土坑例（図6-7）は高台部に二段に開く痕跡を留め、口縁帯直下、頸部上部がやや屈曲し、体部が倒卵形となり、高台端部が肥厚化するなど、後出的な要素が認められる。木崎山遺跡54号土坑例と同様の特徴をもつ長水遺跡例（図6-4）、願成寺境内例（図7-13）も同時期のものであろう。

14世紀～15世紀前半の形態的な特徴として、信夫山頂遺跡（図6-1）、木崎山遺跡68号土坑（図6-8）、大武遺跡（図6-5・6）、願成寺境内（図7-14・15）の各例に見るように、頸部から体部にかけての曲線形が失われ、頸部の上下で屈曲をもち、頸部中位はやや直線的となる。木崎山遺跡68号土坑、丘中学校遺跡（図6-2）、願成寺境内（図7-15）の例に見られるように体部は丸みを帯びて球形化する。高い高台部をもつものは二段に開いた形が崩れて肥厚したまま下方に収めるようになり、さらに高台端部で外方に台形に張り出すようになる木崎山遺跡、大武遺跡の例にその変化を確認できる。以上の特徴は14世紀に顕著で、資料数が少ない15世紀前半の様相は判然としないが、富岡遺跡（図7-20）と那谷寺滝ヶ原道（図6-12）の例は頸部の直線化が顕著となり、おそらく同様の形態が続くものと考えられる。

15世紀後半以後、頸部が短くなり、頸部から体部上位の紐帯にかけて緩やかな曲線形となり、頸部の断面形は鼓形となる。法量差はあるものの、白山橋遺跡（図6-11）、東本願寺前古墓群（図7-18）、富田川河床遺跡（図7-19）、願成寺境内（図7-16・17）の各例がほぼ同形態となる。



1 信夫山頂遺 2 丘中学校遺跡 3 島立南栗遺跡 4 長水遺跡 5・6 大武遺跡 7 木崎山遺跡 54 号土坑
8 木崎山遺跡 68 号土坑 9・10 くつがた遺跡 11 白山橋遺跡 12 那谷寺滝ヶ原道(石川県小松市)

図6 銅製德利形花瓶の諸例と形態変化(1)

体部、高台部は前段階からの形態的な特徴を踏襲する一方で、それまで高い突線で表現されていた紐帯がこの段階以後は退化傾向を示す。突線は幅が狭く低くなり、突線間の溝幅が広くなり、深くなる。15 世紀前半以前にも一部でこの傾向が認められたが、15 世紀後半以後に顕著で、16 世紀後半の富田川河床遺跡例では、ほぼ溝のみで紐帯を表現するようになる。

【共伴遺物の構成・花瓶の性格】

木崎山遺跡 54 号土坑例では銅製の飲食器、六器を、くつがた遺跡例では青磁や銅製の独鈷杵、五鈷杵、火舎、六器、飲食器とともに埋納する(新潟県教育委員会 1992)。また、長水遺跡では銅製の五鈷杵、錫杖などと一緒に埋められた可能性が高い(信濃町立野尻湖博物館 1991、長野市立博物館 1994)。銅製德利形花瓶の出現初期にあたる 13 世紀後半～交 14 世紀は、密教法具の一つとして花瓶が埋納された状況が認められる。寺院伝世例の鎌倉時代製作とされる花瓶は外面に飾りを鋳出すものが散見されるので、これらは埋納されずに後世に伝世した可能性が高い。さらに、この時期の花瓶は越後・上越地域から信濃・北信地域に出土分布が偏る。長水遺跡では近傍に中世寺院の存在も推定されるが、黒姫山という地域の霊山に対する信仰として埋納されたあり方も見受けられる。

14 世紀においては、山岳に対する信仰としての埋納事例として銅製の錫杖や水瓶、六器、火舎、香炉などを伴う陸奥の信夫山頂遺跡例(時枝・高橋 2011)がある一方で、越後・上越地域の木崎山遺跡 68 号土坑例は単独で出土しており(新潟県教育委員会 1992)、信濃・中信地域の丘中学校遺跡例(塩尻市教育委員会 1983)

では寺院の存在も想定される集落内からの出土、越後・中越地域の大武遺跡例(新潟県教育委員会 2000)では農耕祭祀に伴う例が見られるようになる。密教法具を伴う埋納が上越・北信地域から陸奥などの周辺地域へと広がった一方で、初現地である上越・北信地域とその周辺部では密教法具としての花瓶という厳密な意識、位置づけが希薄となり、仏具や祭祀具の一つと見做した上で使用、納置する意味合いが付加されているのが 14 世紀の特徴である。

15 世紀にも銅製飯食器が伴う加賀的那谷寺滝ヶ原道の例(垣内 2010b)や、銅製閼伽桶の中に伝世したものも含めて複数の花瓶を和紙や藁に包み、加えて寺院に伝世させる目的であったと想定される寺院銘入りの金銅製花瓶を添えて埋納した願成寺境内の例(片野 1959)があり、密教法具として意識された花瓶の埋納最終段階となるが、それでも埋納されたものは厳密な密教法具としてのあり方が崩れ去っている。銅製徳利形花瓶の埋納や性格のあり方は、銅製甬字形花瓶と似通っており、両者に互換性が認められる。

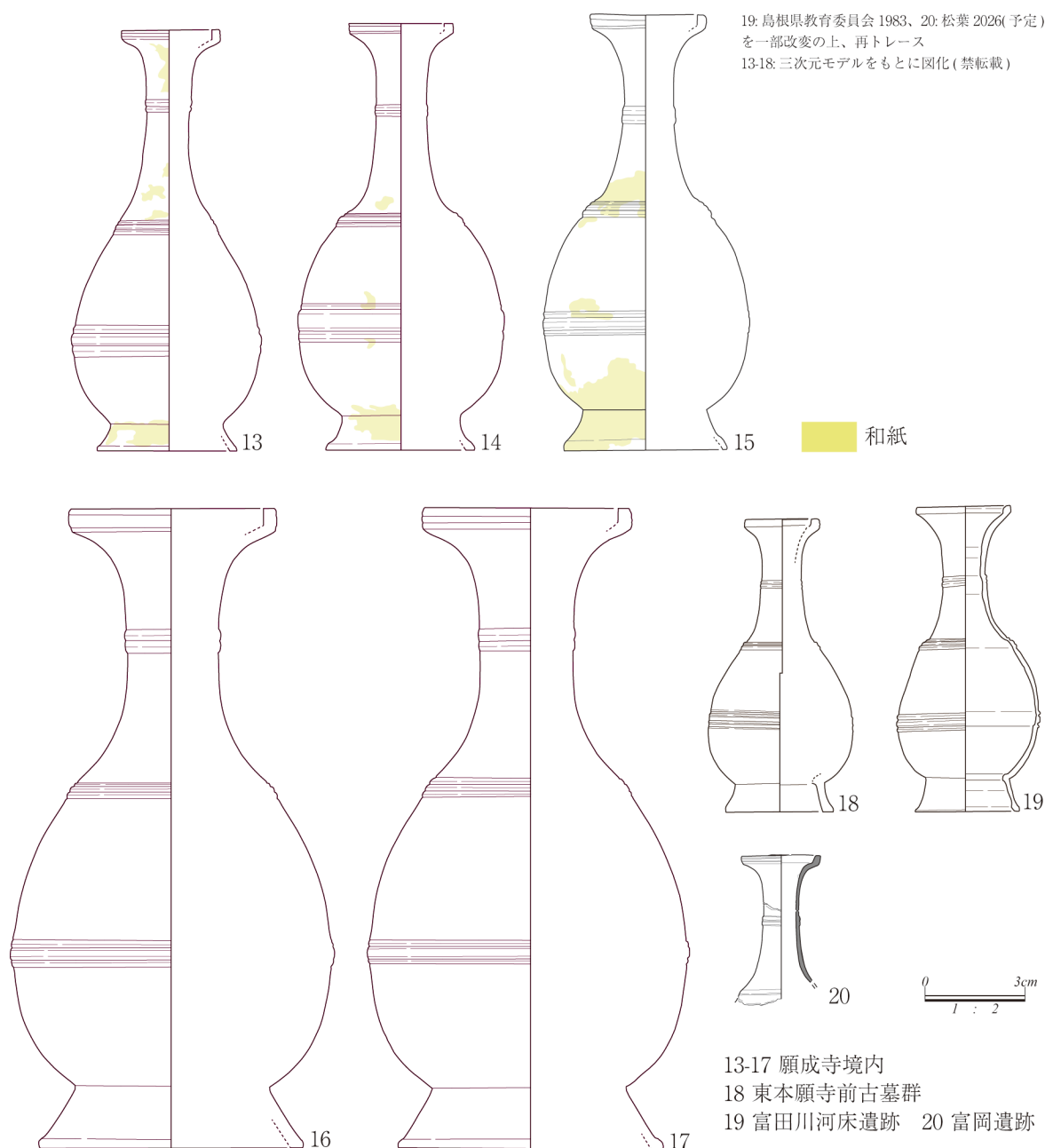


図 7 銅製徳利形花瓶の諸例と形態変化(2)

銅製徳利形花瓶は、中世後期になると京や伊予をはじめ西日本に向けて出土分布の広がりをみせており、井戸からの出土ではあるが、もとは東本願寺前古墓群内に埋納されていた可能性も否定できない事例(京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982)。中世寺院に伴う可能性が想定される伊予・富岡遺跡の例も認められる(松葉 2026)。また、能登では墓地と想定される白山橋遺跡の配石遺構から銅製三具足と共伴するというのもこれまで例を見なかった埋納形態も認められるようになる(穴水町教育委員会 1987)。

密教法具としての初期の性格が完全に失われ、仏具としての性格がより強くなり、その使用や埋納には地域や遺跡間で異なる個別の事情が想定されるのが 15 世紀であり、富田川河床遺跡例(島根県教育委員会 1983)も 16 世紀後半の城下町遺跡からの出土ではありながら花瓶は寺院に伴う可能性が指摘されるなど(西尾 2025)、中世後期には銅製花瓶の性格が大きく変容したことが想定される。

(3) 銅製觚形花瓶

觚形花瓶は、管見に触れるだけで13例が知られる。觚形よりも脚台部が太く短く、体部が大きく、頸部が太い尊形とされるものの出土事例も若干例あり、これらを含めれば実際にはさらに出土事例が増加するものと推察される。觚形花瓶は、中国古銅器の系譜にあり、室町期の出現が指摘されているが(岡崎1982)、出現期から銅製の燭台、香炉とともに、三具足の一つとして觚形花瓶が成立していたことが知られる。

今回の調査研究で、6 例の資料を実見することができた。

【法量・形態的な特徴】

法量は器高15～20数cmまでの幅がある。

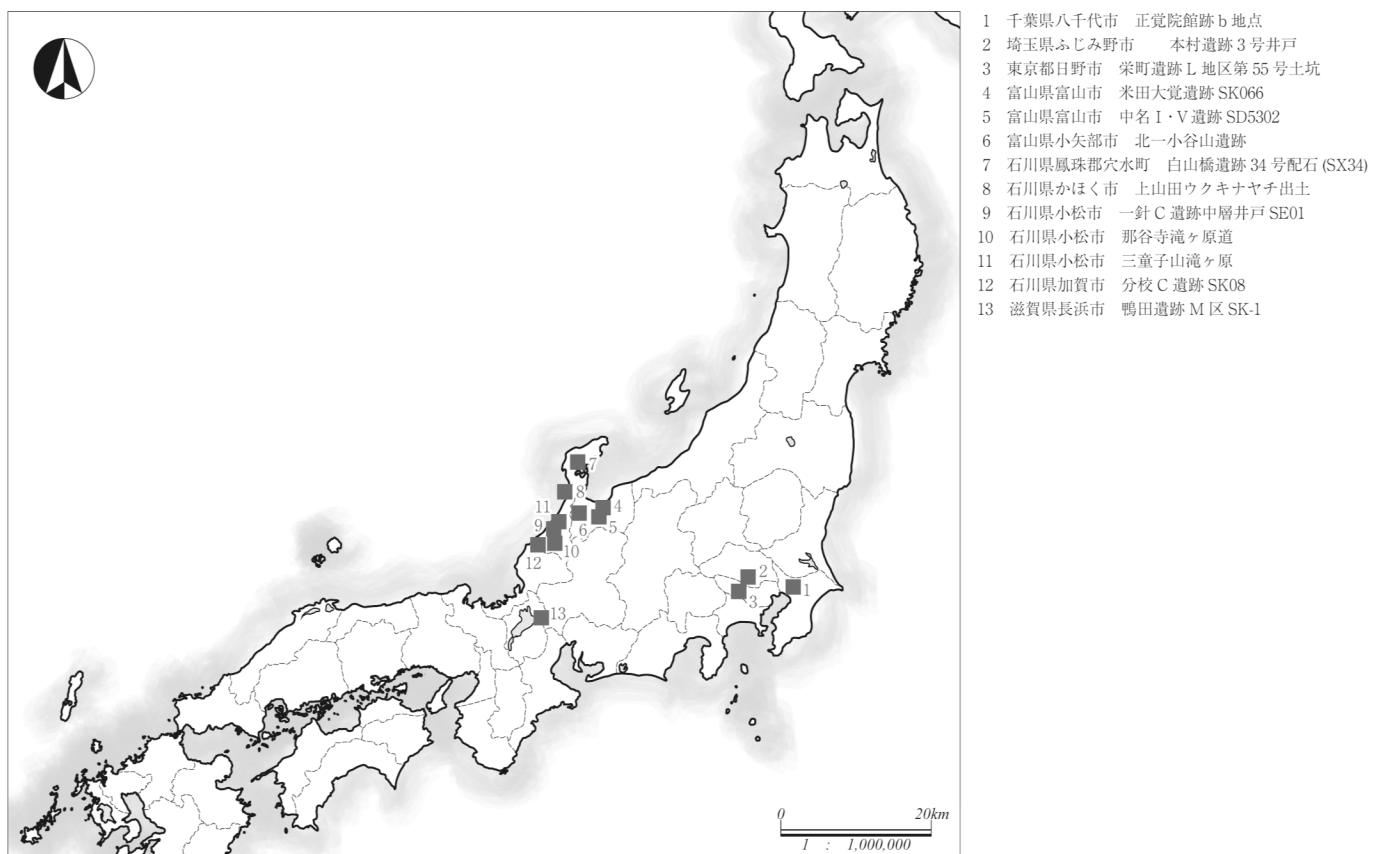
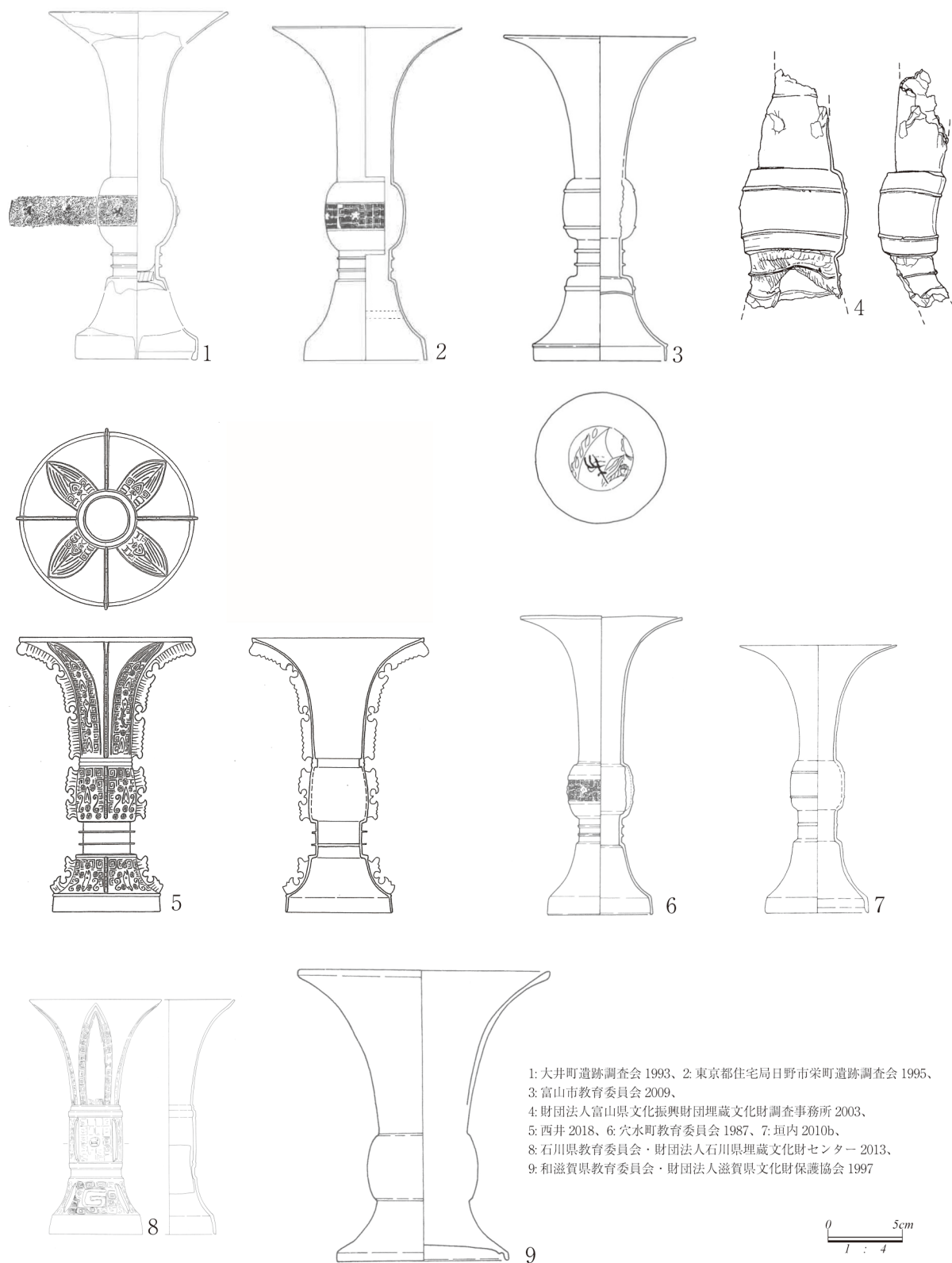


図7 銅製觚形花瓶の分布



1 本村遺跡 2 栄遺跡 3 米田大覚遺跡 4 中名Ⅰ・Ⅴ遺跡 5 北一小谷山遺跡 6 白山橋遺跡
7 三童子山滝ヶ原 8 分校C遺跡 9 鴨田遺跡

図9 銅製德利形花瓶の諸例と形態変化

形態的な特徴として、まず頸部から口縁部にかけて大きく開き、胴部は小さく、脚台部はハの字に開き、端部を下方に折る。胴部上下には二条の突線をもち、間に雷文を施すものも認められる。脚台基部には1条ないしは2条の突線をもつ。

【時代別の消長・分布】

前述のとおり室町期に出現した可能性が指摘されており、例えば穴水町・白山橋遺跡、小松市・滝ヶ原道出土、かほく市・上山田出土の3例も14世紀に伴う可能性が既に指摘されているが(穴水町教育委員会1987、垣内2010b、石川県立郷土資料館1985)。おそらくは北陸から関東にかけての地域で15～16世紀の遺跡に伴う出土分布が認められる。

【型式変化】

総じて時期差と考えられる型式差はない。ただし、図9の5・8、北一小谷山遺跡、分校C遺跡の例に見られるように、鰭や花卉、雷文を伴う古銅器の系譜にあるものと、図9のそれ以外の装飾をもたないシンプルな花瓶とに大別でき、両者の製作、使用に異なる系譜、背景が想定される。また、図9の9、鴨田遺跡は尊形の範疇に含まれる。

【共伴遺物の構成・花瓶の性格】

栄遺跡、北一小谷山遺跡、白山橋遺跡、かほく市上山田ウクキナヤチ、一針C遺跡、小松市三童子山滝ヶ原では銅製の燭台、香炉とともに出土しており、また鴨田遺跡では銅製燭台が出土する。花瓶単独の出土であっても、觚形花瓶は三具足を構成したのであろう。総じて遺跡から出土、不時発見されているが、寺院や墓地に伴うものも存在しており、今後の類例の増加を待って検討する必要がある。

4. 本研究で得られた成果と課題

本研究で得られた成果と課題を以下に列記する。

(1) 皿字形花瓶、徳利形花瓶の型式変化の把握

古代における皿字形花瓶の形態変化はある程度あきらかにされていたが、今回、中世を含めてその型式の変遷をあきらかにした。従来の研究では、皿字形花瓶の形態変化の方向性はある程度示されていたが、徳利形花瓶については全く不明であり、今回、徳利形花瓶出現初期の13世紀以後、15、16世紀にいたるまでの型式変化をあきらかにすることで、今後、その形態的な特徴から帰属年代をある程度類推することが可能となった。

一方で、觚形花瓶は出現から廃絶までの期間が200、300年ほどと短く、その形態変化に乏しいため、今回あきらかにできたことは多くない。そもそも出土事例も十数例ほどと少なく、今後の資料の蓄積が必要である。

(2) 中世における皿字形花瓶、徳利形花瓶がもつ性格の変化の把握

古代における皿字形花瓶は、これまでの調査研究の過程で経塚や寺院、山岳祭祀遺跡などに密教法具として埋納されたことが判明している。今回の検討において、中世においても北陸や北信越地域を中心にその性格が引き継がれて寺院などで他の密教法具などとともに埋納された一方で、それ以降に集落遺跡や城館跡などで仏具や祭祀具として用いられて廃棄された状況も認められることがあきらかとなった。

このことは徳利形花瓶についても同様であり、中世初期の13世紀には出現した後、北陸や北信越地域を中心に寺院や霊山などにおいて他の密教法具などとともに埋納されたこと、時期が降ると集落遺跡や寺院推定地で城下町や寺院、墓地などで必ずしも密教法具を伴わない形で埋納されるようになったことが判

明した。

皿字形、徳利形とその器形は異なるが、ともにその分布範囲や埋納形態には共通性が見られ、両者は互換可能な器物として、中世において密教法具から仏具、祭祀具としてその性格が変容して埋納されるにいたったものと推察される。

今後、このような銅製花瓶が遺跡などから出土した際、その遺跡の性格を考える上で重要に視点になるものとする。

一方、觚形花瓶は三具足の一つとして使用されたものであり、その出現以後、今日まで仏具としての性格が極めて強い。出土事例に見られる分布範囲は北陸地方と関東の一部であるが、中世の政治、文化、信仰の中心地である鎌倉、堺、博多などで今後、類例が増加するものと見込まれる。浄土真宗の教線拡大の脈絡の中で三具足の広がり理解されることも多いが、類例の増加を待って、改めて検討したい。

5. おわりに

今回の銅製花瓶の調査研究を通じて、一定の見通しを得ることができた。特に皿字形花瓶と徳利形花瓶については型式変化、編年をおよそ明らかにできたものとする。また、時代に応じてその性格が変化することも確認することができた。反面、課題として觚形花瓶については調査数そのものも少なく、三具足としての花瓶のあり方と信仰を結びつけて検討するにはいたらなかった。

先行研究が乏しい中、今回の調査研究のテーマに付した「日本海沿岸地域出土の中世銅製花瓶の基礎的研究」について、一定の成果は得られたと思う。しかし、実際には列島各地から出土した銅製花瓶の約 1/3 ほどが実見できたに留まり、今後も継続的に調査研究に取り組んでいきたい。

今回、資料調査を実施したところ、銅製花瓶が希少な器物であるという側面もあつてか、博物館等で常設展示されていたり、地元の自治体で文化財指定の候補としての調査に取り組まれていたり、また寺院や個人が所蔵する資料は代々大切にされてきた経過をうかがい知ることができた。今回の調査研究の成果が、このような方々に広く活用されることを切に願う。

ご芳名は掲げないが、資料調査にご快諾、ご対応いただいた各機関、寺院、個人の関係各位には心より感謝申し上げたい。また、今回の調査研究を行う機会を与えていただいた日本海学推進機構の皆様、富山県民の皆様に深く感謝申し上げます。

本成果の内容の一部は、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要『紀要愛媛』第 22 号(令和 8 年 5 月発行予定)において論考「愛媛県西条市富岡遺跡出土の青銅製花瓶をめぐる」として公表し、また令和 7 年 11 月 21 日開催(愛媛県松山市)の瀬戸内海考古学研究会第 67 回例会において口頭発表している。

脚注

註 1 小池 1997 では那智経塚例を使用するが、図が公表されておらず、実見もしていないため、同時期、12 世紀に伴う宗高尾城跡例を代用して使用する。

引用・参考文献

愛知県美術館 2015『愛知県美術館研究紀要 22 号 木村コレクション編』

穴水町教育委員会 1987『西川島 能登における中世村落の発掘調査』

阿部来 2022「第 1 部 地域論 第 5 章 北陸」『新版 概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編 真陽社

石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター 2013「一般国道 8 号(加賀拡幅)改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 分校 C 遺跡」

石川県立郷土資料館1985『石川県立郷土資料館(第42回)秋季特別展図録 火 くらしと祈り』

石田茂作1965『密教法具』奈良国立博物館監修 臨川書店

石田茂作1977『佛教考古學論攷』五 仏具編 思文閣出版

五十川伸矢1998「銅関連鑄造遺跡 鑄造遺跡からみた古代・中世の銅鑄物生産」『季刊考古学第62号 古代・中世の銅生産』雄山閣出版

五十川伸矢2006「中世の鑄物生産と地域性」『新領域創生研究部門A01-2 日本中世における銅鉄の金属生産とその流通に関する研究 シンポジウム 中世日本の鑄物生産 -日本列島の西と東-』五十川伸矢

伊東市教育委員会1993『寺中・金草原遺跡発掘調査報告書』

岩瀬由美2018「能登における15世紀中葉～17世紀初頭の土師器皿の様相」『石川県埋蔵文化財情報』第39号 (公財)石川県埋蔵文化財センター

岡崎譲治1984「密教法具」『新版 仏教考古学講座』第五巻 仏具 石田茂作監修 雄山閣出版

押水町教育委員会1987『嵯峨井コレクション図録』

大井町遺跡調査会1993「大井町遺跡調査会報告第4集 本村遺跡(第8地点) 大井町立東原小学校新グラウンド造成に伴う発掘調査報告書」

垣内光次郎2010a「第一章 那谷寺と真言・修験 第三節 那谷寺境内の出土遺物」『新修小松市史』資料編9 寺社 新修小松市史編集委員会編 小松市

垣内光次郎2010b「第五章 社殿・境内の造形 第四節 滝ヶ原出土の仏具」『新修小松市史』資料編9

柿田祐司2006「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸・美濃製品』北陸中世考古学研究会

景浦勉1992『観念寺文書 改訂版』

片野温1959「重要文化財 花瓶及關伽桶」『岐阜県指定文化財調査報告書』第三巻 岐阜県教育委員会

金子拓男・宮腰公健1977「くつがた遺跡出土の密教法具」『月刊文化財』1977年7月号(166号) 文化庁文化財保護部監修 第一法規株式会社

川西市教育委員会1985『川西市満願寺』

京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会1982『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』本文編

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター2020「発掘調査略報 一針C遺跡(小松市)」『石川県埋蔵文化財情報』第43号

小池伸彦1997「第Ⅴ章 考察 5.金属製品 密教・密教法具の変遷と大覚寺出土銅花瓶の意義」『史跡大覚寺御所跡 発掘調査報告 大沢池北岸域復元整備事業に伴う調査』大覚寺

國學院大學研究開発推進機構学術資料館2008『服部和彦氏寄贈資料図録Ⅱ 懸仏・仏具』

近藤範序1860「上篇五 北条村」『小松邑志』伊予史談会

斎藤忠ほか1963『日光男体山山頂遺跡発掘調査報告書』日光二荒山神社・喜多川清香編 角川書店

佐々木稔2002『鉄と銅の生産の歴史 -金・銀・鉛も含めて- 増補改訂版』雄山閣出版

財団法人古代学協会1983『平安京跡調査研究報告第6号 平安京左京八条三坊二町』下條信行・川西宏幸編

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1996『富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告 遺物編 一東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ一』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2003『富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第18集 中名Ⅰ・Ⅴ遺跡発掘調査報告 一公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ一』

財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2008『富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第39集 任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ 公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ⅧⅢ』

塩尻市教育委員会1983『丘中学校遺跡 長野県塩尻市丘中学校遺跡発掘調査報告書』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1997『長浜新川中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書Ⅴ』

信濃町立野尻湖博物館1991『博物館だよりNo. 26』

柴田圭子2025「第2章 龍泉窯青瓷碗・皿・盤の編年」『明代龍泉窯青磁の研究』吉川弘文館

信濃毎日新聞社1971『戸隠 -総合学術調査報告-』

島根県教育委員会1983『富口川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

宗教法人池証山正覚院・八千代市遺跡調査会1999『正覚院館跡 一埋蔵文化財発掘調査報告書一』

修善寺町教育委員会1964『伊豆修善寺町の仏教遺物』

太宰府市教育委員会2000『太宰府条坊跡XⅤ -陶磁器分類編-』

田島明人1997「5 北陸」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集 〈共同研究〉中世食文化の基礎的研究 [第1部] 中世食器の地域性』国立歴史民俗博物館

帝室博物館1927『那智発掘仏教遺物の研究』

十日町市教育委員会2005『十日町市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第26集 伊達八幡館跡発掘調査報告書』

東京都住宅局日野市栄町遺跡調査会1995『日野市栄町遺跡 都営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

時枝務・高橋充2011「信夫山頂遺跡出土品の研究(1)」『福島県立博物館紀要』第25号 福島県立博物館

時枝務・高橋充2022「信夫山頂遺跡出土品の研究(8)」『福島県立博物館紀要』第36号 福島県立博物館

富山市教育委員会2009『富山市埋蔵文化財調査報告38 富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書 一米田すずかけ台団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告』

長野県中信土地改良事務所・松本市教育委員会1984『松本市文化財調査報告No. 32 松本市島立南栗遺跡 緊急発掘調査報告書』

長野市立博物館1994『第三十五回特別展 信濃の山岳信仰』

七尾土地地区画整理組合1998『宗高尾城跡・丹波尾城跡 一発掘調査の概要-』七尾土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査団・六甲山麓遺跡調査会

奈良国立博物館1973『新館落成記念 経塚遺宝展目録』

新潟県教育委員会1992『新潟県埋蔵文化財調査報告第28集 北陸自動車道関係発掘調査報告書 木崎山遺跡』

新潟県教育委員会2000『新潟県埋蔵文化財調査報告第97集 一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書I 大武遺跡I(中世編)』

西井龍儀2018「小矢部市北一小谷山遺跡出土の銅製仏具と珠洲収納壺」『大鏡』第37号 富山考古学会

西尾克己2025「富田城下に所在した寺院 一発掘調査の成果から探る-」『島根県古代文化センター研究論集第35号 中世山陰の戦争と地域社会』島根県古代文化センター編 島根県教育委員会

福井県教育委員会・福井県立朝倉氏遺跡資料館1983『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』

豊前市教育委員会1983『豊前市文化財調査報告書第4集 如法寺』

松葉竜司2025「A.富岡遺跡」『愛比売 2024(令和6)年度年報 一発掘調査事業および普及活動事業の記録-』(公財)愛媛県埋蔵文化財センター

松葉竜司2026「愛媛県西条市富岡遺跡出土の青銅製花瓶をめぐる」『紀要愛媛』第22号 (公財)愛媛県埋蔵文化財センター(予定)

水澤幸一2016「第5章 中世の遺跡と遺物 第2節 神社・寺院跡」加茂市史編集委員会編 加茂市

宮島俊定1977「第二章 沿革 第一節 原始・古代」『妻沼町誌』妻沼町誌編集委員会編 妻沼町役場

望月薫弘1981「伊豆修善寺発見の密教法具」『三浦古文化』第29号 京浜急行電鉄株式会社・三浦古文化研究会

村上伸二2006「中世前半東国の鑄造工房」『新領域創生研究部門A01-2 日本中世における銅鉄の金属生産とその 流通に関する研究 シンポジウム 中世日本の鑄物生産 -日本列島の西と東-』五十川伸矢

村木二郎2014「中世鑄造遺跡からみた鉄鍋生産」『考古学と中世史研究11 金属の中世 一資源と流通-』小野正 敏・五味文彦・萩原三雄編 高志書院

村木二郎2018「中世京都七条町・八条院町界限における生産活動 銅細工を中心として」『国立歴史民俗博物館 研究報告第210集 [共同研究] 中世の技術と職人に関する総合的研究』国立歴史民俗博物館

四柳嘉章 1987「中・近世漆器の編年」『西川島-能登における中世村落の調査』石川県穴水町教育委員.

四柳嘉章1997「能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

和歌山県教育委員会・財団法人和歌山県文化財センター1994『根来寺坊院跡 広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人和歌山県文化財センター編

和歌山県教育委員会1984『昭和58年度根来寺坊院跡』

和田千吉1907「常陸国新治郡東城寺村経塚の研究」『考古界第四篇第六号』考古學會